

Effect of adolescent crisis toward personality development

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okada, Tsutomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034764

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



KAKEN

2004

29

金沢大学

青年期危機が人格的発達に及ぼす効果に関する研究

(研究課題番号：13610123)

平成13年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))

研究成果報告書

平成17年3月

研究代表者 岡田 努

(金沢大学文学部)

金沢大学附属図書館



0500-04125-3

研究成果報告書

青年期危機が人格的発達に及ぼす効果に関する研究

(課題番号 13610123)

平成 13 年度～平成 16 年度 科学研究費補助金 基盤(C)(2)

平成17年3月

研究代表者

岡田 努

(金沢大学文学部)

はしがき

本研究は平成13年度から16年度にかけて実施された「青年期危機が人格的発達に及ぼす効果に関する研究」の成果報告である。尺度構成のための予備調査および大学生に対する短期縦断調査の結果を含む。

研究組織

研究代表者 岡田 努(金沢大学 文学部)

交付決定額(配分額)

(金額単位 千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成13年度	1,000	0	1,000
平成14年度	500	0	500
平成15年度	500	0	500
平成16年度	500	0	500
総計	2,500	0	2,500

研究発表

(1) 学会誌等

岡田努 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集行動科学・哲学編 第25号(印刷中)

岡田努 自己の発達と共感性の関係についての探索的研究 自己心理学 第2巻(印刷中)

(2) 口頭発表

岡田努 現代青年の友人関係の構造についての検討 日本心理学会第66回大会 2002年9月26日

岡田努 青年期における自己の諸側面に関する一考察:共感性との関連において 日本教育心理学会 第44回総会 2002年10月12日

岡田努 青年期における自己の発達と内省傾向の関係についての試論 日本心理学会第67回大会 2003年9月15日

岡田 努・榎本博明・谷冬彦 青年期研究の最前線 日本教育心理学会第45回総会自主シンポジウム 2003年 8月23日

岡田努 青年期の自己の発達に関わる要因について 日本心理学会第68回大会 2004年9月12日

岡田努・榎本博明・長峰伸治 青年期研究の応用可能性を考える 日本教育心理学

(3) 出版物

研究成果による工業所有権の出願、取得状況
なし

研究成果

本研究は、いわゆる「青年期危機」と呼ばれる経験が、青年期の人格的発達や適応に対して、果たして有効であるか否かについて、縦断的研究を中心とした実証的な検討を行うことを目的とした。これまで青年心理学においては、青年期の人格発達を促進する前提として、以下のような「青年期危機」と呼ばれる現象が想定されてきた。すなわち

- 1) 青年期は疾風怒濤の時期であり、情緒的不安定を特徴とする。
- 2) 青年は自己に対して内省的になる。
- 3) 青年は内面的に深い友人関係を取ることを希求する。
- 4) 青年は自分自身の生き方について深刻に悩み、試行錯誤を繰り返す。

といった経験を経て初めて、青年は健全な人格発達を達成すると考えられてきた。

しかし、現代青年は、内省傾向や深い友人関係を避ける傾向が指摘されている反面、そうした青年の人格的な発達の未熟さや、不適応は必ずしも見出されていない。

よって、本研究では、こうした危機体験が青年期の人格発達と関わりがあるかどうかについて、縦断研究による実証的検討を行った。

本報告書では尺度構成を目的とした2つの予備調査結果と1つの縦断研究結果を報告する。予備調査については尺度構成のみならず、尺度間の関連性から新たな知見が見出されたため、これも併せて報告する。

(なお予備調査の結果は、研究発表(1)において発表されたものである)

研究成果1

現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究

問題と目的

青年期は人生の他の時期と比べて危機的な時期であると多くの精神科医や青年心理学者によって述べられてきた。この時期には、反抗的態度に加え、精神的疲労性、注意散漫、集中困難が見られクレッチマー(新海訳,1958)はこれを「思春期危機」と命名した。クレッチマーは、思春期危機は、精神病や神経症などとの判別困難な事例が多い反面、多くは一過性のものであり成熟に伴って症状が消失していくとしている。そして危機的な症状は自然な成熟にとって必要な過程であり、こうした時期は、思春期の本能が改変されるために不可欠な転換の時期であるとしている。また笠原(1976)は、青年期における年代ごとでの精神疾患の違いについて次のように指摘している。すなわち、青年期前期(中学前半から高校前半ころ)の対人恐怖症や躁鬱病、青年期後期(高校後半から大学卒業頃)での自殺、アパシー、寡症状の統合失調症、プレ成人期(22, 3歳ころから30歳前後)での不安神経症、メランコリー親和型うつ、完成された妄想型の統合失調症などである。そして対人恐怖症のような青年期に特有の病理は30歳ころには軽快することが多いことも指摘している。このように、青年期は精神的な病理が発生しやすい年代であると考えられている。

これに対して、精神病理や混乱は一般的な青年には必ずしも見られず、多くの青年は平穩にこの時期を通過していくとする立場がある(青年期平穩説)。Offer & Offer(1975)はアメリカ東部の高校生に対する3年間の縦断的研究の結果、青年全体の23%が際だった変化や困難のない連続成長群であり、葛藤や病理的防衛を持つ波乱成長群(35%)や、神経症的症状を示し葛藤の大きい激動的成長群(21%)が大半を占めることはないことを見出した。また村瀬・村瀬(1973)も、平均的青年についての各種の心理検査を施行し、大きな葛藤や変動が見られなかったとしている。

青年期平穩説は、多くの青年が精神病理的困難を示さないことで、青年期危機そのものを否定できとしている。しかし、この場合、精神症状や混乱といった否定的ライフイベントは従属変数とみなされており、ライフイベントが自己の発達に及ぼす影響の有無については、青年期平穩説からは説明できない。また青年期危機の本来的な意味は、危険性よりも crisis の語源である「分岐、峠」に近い意味であり(鑑,2002)、人生の次の段階に向かっての分岐点、ないしは、その時点での心理的決断(清水・頼藤,1976)とされている。すなわち自己を取り巻く対人環境が変化し、あらたな自己像を確立することが必要とされる青年期に、他者との親密な関係や自己の内省が生じ、自己意識の発達が促進されるといった過程までも青年期危機の概念は含んでいる。よって多くの一般青年が大きな混乱なく青年期を通過するとしても、こうした対人関係や自己の変容過程そのものが否定されることにはならない。よって、精神的混乱などのライフイベントが対人関係や自己の発達にいかに関与するのかについての詳細な検討が必要と考えられる。

一方、青年の対人関係と自己の発達の間連については、次のように考えられている。青年期は、人格的共鳴や同一視をもたらすような深い友人関係を持つことや、自分自身に対する関心(内省)が高まることによって、新たな自己概念が獲得され、その結果、健康な成熟が促進されと考えられてきた(西平,1973;1990;岡田,1999b など)。松井(1990)は青年期の友人関係が社会化に果たす役割として、1)緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する存在としての「安定化機能」、2)対人関係場面での適切な行動を学習する機会となる「社会的スキルの学習機能」に加えて、3)友人が自分の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」を挙げている。岡田(1987)は、中学生段階での同性同年代の友人像と理想自己像の間での同一化の過程の後に、高校生以降において理想自己と現実自己の比較によって自尊感情が規定されるようになることを見出し、友人関係におけるモデル機能が自尊感情の発達に関わることを示した。

また自己の発達に関しては次のように考えることができる。自分自身に意識が向きやすい性格特性(自己意識特性)は、他者の目に映る自分自身に注意が向きやすい傾向(公的自己意識)と、自身の内面に注意の向きやすい傾向(私的自己意識)に分けることができる(Fenigstein, Scheier, & Buss,1975)。柏木(1983)は、他者から自分がどのように認識されるかを客観的に把握する側面である公的自己は、感情・好みなど直接的な内的体験の認識である私的自己よりも、自己把握が困難であるとしている。また他者把握においても、表出された観察可能な行動を認識することの他に、直接には観察不可能な他者の内的過程を推測する過程があり、後者の方がより困難であるとしている。そして「他者が自分をどう認識するか」についての把握は、自己把握であると同時に、他者の内的過程(他者自身の認識)への推論でもあり、これは、他者の感情に対する共感性、他者の立場に立って物事を理解する能力(脱中心化)が前提となる。このように他者の視点取得を前提とする公的自己が形成されてのち、はじめて「理想自己」が形成され、現実自己との照応が可能となる(柏木,1983)。すなわち青年期までの自己の発達は、同性同年代の友人関係との同一化に基づいた理想自己像の形成と、他者の視点から見た公的自己(現実自己像)を確立し、両者を照合した自己への評価感情(自尊感情)を持つことが出来るようになる過程であると言える。なお、Duval & Wicklund(1972)は自己覚醒が高まった状態においては自己に対する評価が低下することを指摘している。自己意識特性が高い者は、日常的に自分自身に対する関心が高く自己覚醒が高い状態におかれやすい。そのため自己の適切さへの基準が強く意識され、自尊感情も低下しやすい(岡田,1993)。よって自己意識が高い者ほど、低い自尊感情を持つと考えられる。

一方、現代の青年の友人関係の特徴として、互いが傷つくことを避けるため、内面的な話題を避け、明るく群れる傾向が1980年代後半ころから次第に指摘されるようになってきた(東京都生活文化局,1985;千石,1991;栗原,1996;大平,1995 など)。岡田(1995,1999a, 2002a,2002b)は、こうした傾向が、必ずしも同一の青年に見られる訳ではなく、それぞれの特徴がより顕著に見られる青年群に分かれることを見出してきた。また岡田(1999a)は、青年自身がそうした関わりを理想としている訳ではなく、周りの友人が取っている対人関係のあり方だと認知していることを

見出した。しかし、これらの研究で用いられた尺度は、友人関係のとり方についての青年の態度や動機を含む内容であり、そうした態度や動機が具体的な個々の行動をどこまで反映したものであるかについては明らかとなっていない。さらに、先に述べたように、青年期における友人関係の深まりが自己の発達を促すならば、現代的な希薄な友人関係を取る青年は、個々の行動においても内面を開示しあうような行動が見られず、その結果、自己の発達についても負の影響を受けていると考えることができる。よって本研究では、以下の二点を目的とした調査研究を行う。

- 1) 友人関係の態度・意識と行動の関係を探索的に検討するため、行動に関するリストを作成し、その構造を検討する。
- 2) ライフイベント、友人関係における態度・意識、行動が自己意識の発達に影響するモデルを構成し、その過程を推定する。

予備調査

青年の友人関係における具体的な行動を把握・分類するための予備調査を行う。

調査対象 高校生：金沢大学オープンキャンパス時に見学に訪れた石川県内の高校生のうち承諾が得られた1～3学年生徒 49 名(男子 10 名、女子 39 名)(2001 年 8 月実施)

大学生：金沢大学の3、4年学生 31 名(男子 13 名、女子 18 名)講義時間および個別に配布(2001 年8月～12 月実施)

調査項目 榎本(1999)における「活動的側面」、遠矢(1996)、総務庁青少年対策本部(1999)などをもとに、青年の交友関係の行動に関する38項目を作成し、「最も親しく付き合っていると思う同性の友だちを一人」(親友)および「日常付き合う友だち『グループ』」について、各項目の中で、ふだんの付き合いとして、あてはまるもの(複数回答可)に○をつけるよう教示した。また呈示された項目以外に、「その人(たち)とどのような付き合いをしますか? 思いっただけ記入してください」の教示によって、自由記述による友人関係での行動の記述を求めた。

結 果

Table 1 に各項目での選択数を示す。選択頻度が親友、グループのいずれかにおいて2以下であった「交換日記をする」「一緒に習い事に行く」は本調査項目からは除外された。また自由記述回答について、類似内容のものを取りまとめ30項目に集約した(Table 2)。これらを合わせた66項目を友人との行動内容(以下「友人行動」と表記する)項目とし本調査に用いることとした。

Table 1 友人行動の選択頻度(予備調査)

	親友		グループ	
	度数	%	度数	%
1. これからの生き方についての話をする	57	71.3	27	33.8
2. 人生観についての話をする	43	53.8	20	25.0
3. 自分の性格についての話をする	58	72.5	35	43.8
4. 将来についての話をする	65	81.3	39	48.8
5. お互いの欠点の話をする	37	46.3	15	18.8
6. お互いの長所の話をする	46	57.5	23	28.8
7. 意見が違うときに納得するまで話し合う	23	28.8	12	15.0
8. 喜びを分かち合う	62	77.5	50	62.5
9. 悲しみを分かち合う	44	55.0	32	40.0
10. 自分の趣味についての話をする	61	76.3	46	57.5
11. お互いに不満に思っている点を言い合う	27	33.8	13	16.3
12. トイレに一緒に行く	20	25.0	27	33.8
13. 教室を移動するときは一緒に行く	40	50.0	45	56.3
14. 交換日記をする	2	2.5	2	2.5
15. 自分の悩みを手紙に書いて交換する	15	18.8	4	5.0
16. 日頃の出来事を手紙に書いて交換する	13	16.3	6	7.5
17. 一緒に登下校する	27	33.8	16	20.0
18. 一緒に勉強する	23	28.8	21	26.3
19. テレビ番組の話をする	54	67.5	51	63.8
20. 好きなタレントの話をする	44	55.0	47	58.8
21. 一緒に習い事に行く	4	5.0	1	1.3
22. 部屋の中でゲームをする	13	16.3	9	11.3
23. お互いの家で一緒に遊ぶ	34	42.5	23	28.8
24. 何となく家に集まって時を過ごす	29	36.3	19	23.8
25. 休日に出掛ける	46	57.5	29	36.3
26. 自転車に乗ってブラブラする	11	13.8	8	10.0
27. 一緒にゲームセンターに行く	8	10.0	6	7.5
28. 外で遊ぶ	28	35.0	22	27.5
29. 一緒にスポーツをする	22	27.5	18	22.5
30. カラオケに行く	37	46.3	40	50.0
31. メールでメッセージを送り合う	56	70.0	47	58.8
32. 特に用事もないのに電話で長く話をする	21	26.3	3	3.8
33. お昼を一緒に食べる	50	62.5	52	65.0
34. 相手が怒っているときに、なだめる	42	52.5	32	40.0
35. 失敗したときに、すぐに謝る	43	53.8	41	51.3
36. 親に言えないようなことを相談する	52	65.0	21	26.3
37. 恋愛についての相談をする	56	70.0	32	40.0
38. 困っているとき相談に乗る	66	82.5	52	65.0

Table 2 自由記述回答に基づいて作成された項目

学校での出来事の話をする, 学校での行事の話をする, 授業の話をする, 先生についての話をする, 休み時間に一緒にいる, 一緒にボーっとする, 一緒に部活やサークル活動をする, 一緒にプリクラを撮る, プリクラの交換をする, 一緒に旅行する, 一緒に酒を飲みに行く, 一緒にお茶をしに行く, 一緒に食事をしに行く, 一緒に合コンに行く, 一緒に買い物に行く, アルバイトを紹介しあう, 一緒にアルバイトをする, 互いの家に泊まる, 自分の言いたいことをはっきりと言う, ノートを貸し借りする, とりとめのない話をする, 試験や授業の情報交換をする, スポーツの話をする, 携帯電話の番号を教え合う, メールアドレスを教えあう, 電話をかけあう, 無理に相手を理解しようとしないう, 送り迎えをし合う, 互いの勉強の邪魔をする, ふざけあう

本調査

方 法

以下の尺度項目を用いた質問紙調査を行った。

尺度項目

- 1) 友人行動: 予備調査において作成された項目を加えた66項目について、「最も親しく付き合っていると思う同性の友だち1名とのつきあい方」(親友評定), および「日常付き合う友だちグループとのつきあい方」(グループ評定)について、あてはまるものにマークをするよう求めた。
- 2) 友人関係に対する態度: 岡田(1999b)で作成された現代青年に特有な友人関係に関する尺度(以下「友人関係尺度」と記す)。自分自身がどのような友人関係の取り方をするかについての質問項目から成る。内面的な関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり方を示す「自己閉鎖」、友人から自分が否定的に評価されないよう気をつかう関わり方を示す「自己防衛」、友人を不快にさせないよう気をつかう関わり方を示す「友だちへのやさしさ」、楽しく円滑な関係を取る「群れ」の下位尺度から成る計41項目。ただし岡田(1999b)では「群れ」下位尺度に相当する項目は下位尺度内での因子負荷量の差が極端に大きく、実質的に上位2項目で因子の性質が規定されている可能性があるため(上位2項目が.80以上、それ以外の3項目が.38～.49)、本研究では再度項目を追加し、再検討を行う。「まったく当てはまらない」(1)～「とてもあてはまる」(6)までの6段階評定で、各項目について該当する段階1カ所に○をつけるよう求めた。
- 3) 自己意識: Fenigstein, Scheier, & Buss(1975)を菅原(1984)が邦訳した自己意識尺度21項目。2)と同様の6段階評定とした。
- 4) 自尊感情: Rosenberg(1965)に基づき山本・松井・山成(1982)が邦訳翻案した個人の全体的な自尊感情の水準を測る尺度10項目。2)と同様の6段階評定とした。
- 5) ライフイベント: 榎本(1999)が作成したライフイベントに関する尺度。肯定・否定それぞれについて、対人、達成、両関連、無関連の各領域に分かれる。本研究では、これらのうち、「恋人がほしいのにできない」など、過去に経験した事柄ではなく現状に対する記述や意味が不明確な項目を除いた114項目を用いた。回答は最近3ヶ月の経験に関して、該当するライフイベントにマークするよう求めた。

回答協力者

関東地方の複数の4年制大学および金沢大学の大学生(各学部)
年齢 18歳～23歳
有効回答数 188名(男子68名, 女子120名)
実施時期 2003年1月 心理学関係授業にて一斉施行

結 果 と 考 察

1 項目の分析

1) 友人行動: 親友評定, グループ評定それぞれについて, 無回答項目を1, 回答のあった項目を2とコード化し, 名義尺度に基づくカテゴリカル主成分分析による項目の分類を行った。

親友評定については, 固有値の減少から4主成分を抽出した。得られた主成分負荷量について PROMAX 回転を行い, .5 以上の負荷量をもつ項目について解釈を行った (Table 3)。その結果, 第1因子は「人生観についての話をする」「これからの生き方についての話をする」など内面的な自己開示をする項目から成り「開示」因子とした。第2因子は「ノートを貸し借りする」「教室を移動するとき是一緒に行く」など学校生活の項目から成るため「学校生活」因子と命名した。第3因子は「部屋の中でゲームをする」「一緒にスポーツをする」「お互いの家で一緒に遊ぶ」など学外・特に互いの家で一緒に行動する内容の項目から成り「家での生活」因子と命名した。第4因子は「携帯電話の番号を教え合う」「メールアドレスを教えあう」など携帯電話やメールを通じた関係の項目から成り「携帯・メール」因子と命名した (Table 3)。

友人グループ評定については, 固有値の減少から3主成分を抽出した。親友評定と同様に PROMAX 回転を行い, .4 以上の項目を各因子を代表する項目として解釈した。その結果, 第1因子は「これからの生き方についての話をする」「人生観についての話をする」など内面的な開示をして互いに語り合う内容の項目から成り「開示」と命名された。第2因子は, 「互いの家に泊まる」「一緒にゲームセンターに行く」など学外で一緒に遊ぶ内容の項目から成り「一緒に遊ぶ」, 第3因子は「休み時間に一緒にいる」「教室を移動するときは一緒に行く」など学校生活に関連した項目から成り「学校生活」と命名された (Table 4)。

2) 友人関係に対する態度: 重みなし最小2乗法による因子分析を行い, PROMAX 回転を行った。40 以上の項目について解釈した結果, 第1因子は, 「本当の気持ちは話さない」「自分の心をうち明けて話す (逆転項目)」など自分の内面を開示しない傾向を表す項目に負荷量が高く「自己閉鎖」と命名された。第2因子は, 「ウケるようなことをする」「冗談を言って相手を笑わせる」など, 楽しく円滑な関係を示す項目への負荷量が高く, 「軽躁的關係」と命名された。第3因子は, 「相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける」「友だちの内面に土足で踏み込まないようにする」など, 友人の内面に侵入すること避ける傾向を示す項目への負荷量が高く「侵入回避」と命名された。第4因子は「友だちから傷つけられないようにふるまう」「友だちからバカにされないように気をつける」など友人から否定的評価をされ心理的に傷つくこと避ける傾向を示す項目に対する負荷量が高く「傷つけられ回避」と命名された (Table 5)。各因子に負荷量の高い項目から下位尺度を構成し, 合成得点についての Cronbach の α 係数を求めた。その結果「自己閉鎖」が.84, 「軽躁的關係」が.83, 「侵入回避」が.72, 「傷つけられ回避」が.71 となり一応の信頼性が得られた。

3) 自己意識尺度について, 各下位尺度ごとに Cronbach の α 係数を求めた。その結果「公的自己意識」.88, 私的自己意識が.86 で十分な内的一貫性が認められた。

4) 自尊感情尺度: 尺度の一次元性を確認するため主成分分析を行ったところ、「敗北者だと思ふことがよくある」以外の項目はすべて第1主成分に.60以上の高い負荷量をもつため、以後の分析においては、本項目を除いた合成得点をもって自尊感情得点とする(Table 6)。^{註1}

5) ライフイベント: 個々のライフイベントを経験するかどうかは、各人が置かれた状況に左右される面が大きく、ある項目で示されるライフイベントを経験したとしても、内容的に同一カテゴリの別のライフイベントを経験しやすいとは言えない。よって項目間での出現頻度の類似性に基づいて項目を分類・集約する方法には意味がないことになる。よって今回は、榎本が内容分析から想定したカテゴリごとでの反応数を合計し、それを各領域ごとでの経験頻度とした。

Table 3 友人行動 親友評定でのパターン行列

項目\因子	1開示	2学校生活	3家での生活	4携帯・メール
7 人生観についての話をする	.707	-.149	-.041	-.188
1 これからの生き方についての話をする	.703	-.153	-.183	-.094
21 お互いの長所の話をする	.660	.020	.125	-.042
11 将来についての話をする	.646	-.109	-.072	-.048
5 自分の性格についての話をする	.574	-.077	.036	.039
3 親に言えないようなことを相談する	.561	-.105	-.126	.152
52 意見が違うときに納得するまで話し合う	.551	.092	.216	-.268
17 お互いの欠点の話をする	.548	.073	.178	-.376
51 困っているとき相談に乗る	.509	.027	-.114	.174
57 悲しみを分かち合う	.487	-.008	-.007	.256
65 相手が怒っているときに、なだめる	.483	.243	-.052	.002
16 喜びを分かち合う	.440	.031	-.049	.215
27 自分の言いたいことをはっきりと言う	.439	-.067	.231	-.093
50 恋愛についての相談をする	.437	-.033	-.025	.327
53 一緒にお茶をしに行く	.431	.018	-.080	.388
43 自分の悩みを手紙に書いて交換する	.423	-.012	-.104	.048
41 一緒に旅行する	.413	.036	.053	.153
66 失敗したときに、すぐに謝る	.400	.150	-.060	.131
23 とりとめのない話をする	.392	-.054	-.216	.193
25 電話をかけあう	.386	.060	.257	.134
58 日頃の出来事を手紙に書いて交換する	.324	.117	-.034	-.119
44 特に用事もないのに電話で長く話をする	.260	-.034	.028	.054
6 一緒にボーっとする	.249	.144	.033	-.015
13 自分の趣味についての話をする	.233	.114	.175	.049
31 ノートを貸し借りする	-.095	.728	-.097	.034
38 教室を移動するときは一緒に行く	-.100	.669	.003	.077
2 休み時間に一緒にいる	-.144	.663	.089	.002
12 試験や授業の情報交換をする	-.098	.637	-.129	.029
35 一緒に勉強する	.218	.601	-.022	-.114
15 授業の話をする	.033	.596	-.003	.134
34 トイレと一緒に行く	-.109	.589	.023	-.085
64 お昼を一緒に食べる	.087	.572	-.101	.125
9 学校での行事の話をする	.095	.520	-.142	.141
18 先生についての話をする	-.097	.518	-.087	.139
46 一緒に登下校する	.043	.478	.167	-.013
24 アルバイトを紹介しあう	-.128	.306	.300	.032
61 部屋の中でゲームをする	-.268	.002	.672	-.096
62 一緒にスポーツをする	-.056	.010	.656	.034
49 お互いの家で一緒に遊ぶ	-.007	-.268	.609	.043
55 何となく家に集まって時を過ごす	-.122	-.188	.607	.085
60 互いの家に泊まる	-.126	-.317	.578	.076
59 一緒にゲームセンターに行く	-.169	.111	.472	.094
29 スポーツの話をする	-.063	.143	.455	.057
26 一緒にアルバイトをする	.028	.316	.445	-.163
10 ふざけあう	.118	-.042	.421	.165
30 送り迎えをし合う	.013	-.117	.377	.136
14 一緒にお酒を飲みに行く	-.030	-.168	.376	.356
45 自転車に乗ってブラブラする	.025	.062	.375	-.067
28 カラオケに行く	.039	.109	.339	.226
48 一緒に部活やサークル活動をする	-.003	.182	.309	-.025
20 一緒に合コンに行く	.027	.107	.305	.168
36 一緒に食事をしに行く	.176	.041	.247	.131
37 無理に相手を理解しようとしな	.145	.101	-.161	-.006
33 携帯電話の番号を教え合う	-.251	.028	.117	.644
19 メールアドレスを教えあう	-.114	.069	.067	.545
63 メールを送り合う	.092	.064	-.019	.536
32 一緒に買い物に行く	.048	-.028	.253	.496
47 学校での出来事の話をする	.124	.151	-.109	.477
22 ブリクラの交換をする	.186	.046	-.033	.454
8 一緒にブリクラを撮る	.246	-.017	.026	.438
40 テレビ番組の話をする	-.154	.208	.254	.417
39 お互いに不満に思っている点を言い合う	.321	.102	.332	-.409
56 一緒に外で遊ぶ	.100	-.018	.310	.371
42 好きなタレントの話をする	.101	.190	.153	.364
54 休日に出掛ける	.155	-.090	.284	.320
4 互いの勉強の邪魔をする	-.065	.230	.184	-.240

Table 4 友人行動 グループ評定でのパターン行列

項目\因子	1 開示	2 一緒に遊ぶ	3 学校生活
1 これからの生き方についての話をする	.783	-.165	-.103
7 人生観についての話をする	.717	-.133	-.110
21 お互いの長所の話をする	.715	.026	-.042
65 相手が怒っているときに、なだめる	.668	-.067	.009
27 自分の言いたいことをはっきりと言う	.653	-.017	-.198
11 将来についての話をする	.638	-.201	.006
5 自分の性格についての話をする	.603	-.008	-.010
66 失敗したときに、すぐに謝る	.591	-.058	.082
3 親に言えないようなことを相談する	.575	.037	-.067
51 困っているとき相談に乗る	.526	.035	.064
13 自分の趣味についての話をする	.519	-.084	.081
57 悲しみを分かち合う	.487	.064	.220
16 喜びを分かち合う	.484	.130	.171
50 恋愛についての相談をする	.465	.037	.237
17 お互いの欠点の話をする	.432	.086	-.122
52 意見が違うときに納得するまで話し合う	.365	.227	-.107
39 お互いに不満に思っている点を言い合う	.341	.107	-.004
23 とりとめのない話をする	.320	-.181	.204
6 一緒にボーっとする	.267	.069	.250
44 特に用事もないのに電話で長く話をする	.198	.078	-.011
37 無理に相手を理解しようとしな	.148	-.074	.099
60 互いの家に泊まる	-.044	.766	-.109
61 部屋の中でゲームをする	-.247	.747	-.007
49 お互いの家で一緒に遊ぶ	-.007	.706	-.163
62 一緒にスポーツをする	.096	.641	-.167
59 一緒にゲームセンターに行く	-.145	.631	.063
55 何となく家に集まって時を過ごす	.024	.628	-.171
48 一緒に部活やサークル活動をする	-.035	.574	-.125
30 送り迎えをし合う	-.038	.543	-.140
56 一緒に外で遊ぶ	.049	.527	.186
54 休日に出掛ける	.300	.496	.006
29 スポーツの話をする	.003	.493	.077
28 カラオケに行く	-.147	.487	.280
14 一緒にお酒を飲みに行く	.058	.487	.055
26 一緒にアルバイトをする	-.077	.454	-.089
10 ふざけあう	.099	.410	.086
45 自転車に乗ってブラブラする	-.076	.395	-.128
24 アルバイトを紹介しあう	-.027	.387	.157
25 電話をかけあう	.095	.344	.221
36 一緒に食事をしに行く	.132	.267	.168
4 互いの勉強の邪魔をする	.068	.253	.127
46 一緒に登下校する	.136	.247	.236
58 日頃の出来事を手紙に書いて交換する	.005	.095	-.020
2 休み時間に一緒にいる	-.265	-.263	.773
38 教室を移動するときは一緒に行く	-.200	-.176	.730
31 ノートを貸し借りする	-.168	-.132	.675
18 先生についての話をする	.037	-.179	.637
64 お昼と一緒に食べる	-.063	-.129	.616
47 学校での出来事の話をする	.006	-.039	.583
42 好きなタレントの話をする	-.093	.218	.517
12 試験や授業の情報交換をする	.136	-.238	.487
34 トイレに一緒に行く	.063	.001	.457
33 携帯電話の番号を教え合う	-.103	.118	.455
40 テレビ番組の話をする	-.108	.349	.454
35 一緒に勉強する	.123	-.023	.449
15 授業の話をする	.158	-.163	.444
22 プリクラの交換をする	.063	.067	.438
63 メールを送り合う	.058	.084	.436
19 メールアドレスを教えあう	.063	.045	.413
8 一緒にプリクラを撮る	.088	.142	.377
32 一緒に買い物に行く	.166	.294	.370
53 一緒にお茶をしに行く	.325	.170	.332
20 一緒に合コンに行く	-.023	.204	.304
9 学校での行事の話をする	.155	.008	.295
41 一緒に旅行する	.187	.155	.256

Table 5 友人関係尺度の因子分析 PROMAX 回転後のパターン行列

項目\因子	1 自己閉鎖	2 軽躁的 関係	3 侵入回避	4 傷つけられ回避	共通性
9 本当の気持ちは話さない	.710	.094	.093	.130	.528
1 自分の心をうち明けて話す	-.676	-.031	-.006	.061	.444
5 悩みごとを相談する	-.671	.041	-.093	.171	.504
15 落ち込んだとき話を聞いてもらう	-.623	.047	-.081	.276	.480
17 あたりさわりのない会話ですませる	.588	.134	-.034	.271	.401
23 浅い付き合いにとどめる	.563	-.101	-.023	.173	.393
35 自分の内面に踏み込まれないように気をつける	.547	.089	.314	.054	.433
34 友だちの心の支えになろうとする	-.537	.095	.296	.004	.397
25 まじめな話題を避ける	.487	.049	-.214	.317	.324
37 まじめな話題になると冗談でごまかす	.434	.178	-.045	.036	.167
30 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せない	.372	.026	.282	-.029	.230
8 ウケるようなことをする	.238	.815	-.097	-.037	.561
4 冗談を言って相手を笑わせる	.055	.777	-.044	-.130	.550
39 おもしろい話をする	.080	.770	-.034	.003	.551
16 友だちの前で はしゃぐ	.025	.727	-.123	-.070	.495
41 友だちと一緒に騒ぐ	-.053	.620	-.021	-.148	.395
11 楽しい雰囲気になるようふるまう	-.021	.533	.158	.010	.345
32 必要に応じて友だちを頼りにする	-.037	.276	.000	.108	.107
7 相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける	-.003	-.049	.611	-.072	.347
27 友だちの内面に土足で踏み込まないようにする	.042	.040	.574	-.002	.343
12 お互いのプライバシーに立入らない	.291	-.025	.556	-.054	.412
22 相手の気持ちに気をつかう	-.100	.176	.544	-.033	.355
38 相手に甘えすぎない	.178	.020	.543	-.314	.338
14 友だちに心配かけないように気をつける	-.015	-.061	.530	.246	.404
26 お互いの約束をやぶらない	-.197	-.091	.522	-.171	.258
42 相手の世界に口出ししない	.112	-.154	.448	-.042	.230
18 友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける	-.129	.189	.361	.317	.398
29 相手にやさしくするよう心がける	-.235	.203	.361	.038	.276
28 友だちをがっかりさせないよう気をつける	-.080	-.004	.362	.390	.362
3 友だちを傷つけないようにする	-.101	.103	.339	.248	.265
20 相手の言うことに口をはさまない	.083	-.140	.322	-.007	.129
33 しらけた雰囲気にならないようにする	.036	.300	.315	.114	.262
21 友だちにグチを言わないようにする	.164	-.164	.302	.121	.188
24 友だちから傷つけられないようにふるまう	.169	-.031	-.070	.591	.362
10 友だちからバカにされないように気をつける	.204	-.124	.026	.590	.413
13 仲間の前で恥をかかないように気をつける	.157	-.169	.005	.575	.373
6 友だちから「つまらない人」と思われないよう気をつける	.036	.211	-.067	.560	.379
2 友だちからどう見られているか気にする	-.166	.006	-.143	.484	.241
36 友だちに 人前で恥をかかせないよう気をつける	-.091	-.110	.212	.382	.222
19 友だちと同じ持ち物を持つ	-.033	-.045	-.091	.363	.117
40 友だちと意見が対立しないよう気をつける	.136	-.095	.030	.349	.156
31 相手の気持ちを聞き出そうとする	-.256	.167	-.104	.314	.226
説明された分散合計 (%)	12.27	11.06	5.58	5.29	

因子相関行列

因子	2	3	4
1	-.338	.099	.040
2		.152	.193
3			.293

Table 6 自尊感情尺度の主成分負荷量

項目\主成分	1	2	共通性
1 自分に自信がある	.776	.209	.646
2 少なくとも人並みには価値のある人間である	.784	.291	.700
3 いろいろな良い素質をもっている	.774	.282	.679
4 敗北者だと思ふことがよくある	-.322	.857	.838
5 物事を人並みにはうまくやれる	.658	.191	.469
6 自分には自慢できるところがあまりない	-.734	.016	.540
7 自分に対して肯定的である	.766	.066	.591
8 だいたいにおいて自分に満足している	.775	.029	.601
9 自分が全くだめな人間だと思ふことがよくある	-.703	.491	.736
10 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ	-.771	.226	.645
説明された分散(%)	51.68	12.76	

2 友人関係尺度と行動尺度の相関

友人行動尺度と友人関係尺度の相関を Table 7 に示す。ここに見られるように、友人関係尺度の「自己閉鎖」下位尺度と親友行動の「開示」及びグループ行動での「開示」の間で負の相関関係が見られ、内面的関係については、実際の行動との対応が見られると考えられる。ただし両者の間では内容的に類似した項目も含まれているため、十分な評価は困難である。また他の下位項目に関しては、相関関係はほとんど見られなかった。このことは、友人関係尺度の下位尺度に見られるような関係の性質は、必ずしも個々の行動と一対一に対応していないことを示している。すなわち、同じ行動を取っても、その関係についての青年自身の解釈は個人間では一貫しておらず、内面的な内容についての自己開示を除いては、個々の行動からは友人関係に対する態度や動機を推測することが困難であると言えるだろう。

Table 7 友人関係尺度と友人行動の相関(Spearman の順位相関係数)

	友人行動 (親友評定)			
	開示	学校生活	家での生活	携帯・メール
自己閉鎖 (N=183)	-.337**	-.083	.007	-.037
軽躁的關係 (N=183)	.224**	.055	.129	.024
侵入回避 (N=183)	.084	.034	-.078	.141
傷つけられ回避 (N=187)	-.170	.052	-.054	-.083

	友人行動 (グループ評定)		
	開示	一緒に遊ぶ	学校生活
自己閉鎖 (N=183)	-.437**	-.176*	-.116
軽躁的關係 (N=183)	.230**	.199**	.181*
侵入回避 (N=183)	-.141	-.076	-.037
傷つけられ回避 (N=187)	.056	-.045	.006

** : p < .01, * : p < .05

3 自己意識・自尊感情との関係

友人関係尺度、友人行動およびライフイベントと自己意識、自尊感情と相互の相関係数を求めた。(Table 8,9,10)。ここに見られるように否定的ライフイベントとの間には.30以上の相関が見られるものではなく、否定的イベント(危機体験)は友人関係にも自己の発達にも大きな関わりが見られないことが明らかとなった。

Table 8 友人関係と自尊感情・自己意識の相関

	自尊感情	公的自己意識	私的自己意識
友人関係尺度 ピアソンの積率相関係数			
	n=182	n=184	n=184
自己閉鎖	-.146*	-.114	-.138
軽躁的關係	.197**	.271**	.051
侵入回避	.059	-.010	.210**
傷つけられ回避	-.175*	.539**	-.035
友人行動(親友評定)Spearman の順位相関係数			
	n=185	n=187	n=187
開示	.207**	.067	.363**
学校	-.034	.097	.006
家	.047	-.087	.014
携帯・メール	.059	.008	-.016
友人行動(グループ評定)Spearman の順位相関係数			
	n=185	n=187	n=187
開示	.141	.065	.066
一緒に遊ぶ	.125	-.098	-.067
学校生活	-.010	.086	-.072

**: $p < .01$, *: $p < .05$

Table 9 ライフイベントと自尊感情・自己意識の間の Spearman の順位相関係数

	自尊感情 n=186	公的自己意識 n=188	私的自己意識 n=188
否定的イベント			
対人	.023	.165*	.219**
達成	-.243**	.096	.094
両関連	-.186*	.256**	.103
無関連	-.085	.108	.050
肯定的イベント			
対人	.301**	.042	.201**
達成	.312**	-.066	.152*
両関連	.271**	-.014	.205**
無関連	.112	.014	.020

**: $p < .01$, *: $p < .05$

Table 10 ライフイベントと友人関係尺度・友人行動の相関(Spearman の順位相関係数)

イベント\友人関係	自己閉鎖 n=184	軽躁的關係 n=184	侵入回避 n=184	傷つけられ回避 n=188
否定的イベント				
対人	-.119	.138	.047	.090
達成	-.013	.001	-.075	.117
両関連	-.031	.104	.046	.168*
無関連	-.024	.161*	.042	.022
肯定的イベント				
対人	-.293**	.235**	.086	-.085
達成	-.173*	.108	.075	-.138
両関連	-.249**	.166*	.101	-.117
無関連	-.080	.149*	.105	-.060
イベント\友人行動 (親友評定)n=187	開示	学校生活	家での生活	携帯・メール
否定的イベント				
対人	.218**	-.010	.115	.047
達成	.049	-.020	-.026	-.078
両関連	.087	.094	.077	.105
無関連	.050	.098	.142	.080
肯定的イベント				
対人	.372**	.060	.060	.222**
達成	.309**	.089	-.015	.129
両関連	.301**	.014	-.023	.107
無関連	.149*	-.006	.241**	.275**
イベント\友人行動 (グループ評定)n=187	開示	一緒に遊ぶ	学校生活	
否定的イベント				
対人	.202**	.073	.146*	
達成	.077	.000	.158*	
両関連	.112	.074	.199**	
無関連	.140	.120	.242**	
肯定的イベント				
対人	.340**	.226**	.253**	
達成	.377**	.172*	.231**	
両関連	.271**	.083	.095	
無関連	.206**	.183*	.161*	

**: $p < .01$, *: $p < .05$

次にこの相関関係を参考に(1)友人関係に対する態度→自己意識→自尊感情(2)友人行動(親友評定)→自己意識→自尊感情(3)友人行動(グループ評定)→自己意識→自尊感情(4)否定的ライフイベント→自己意識→自尊感情(5)肯定的ライフイベント→自己意識→自尊感情についてのモデルを構成し最尤法による共分散構造分析を行った。(各潜在変数に対応する観測変数には、下位尺度の合成得点ないしは、頻度の合計を用いた。観測変数の誤差分散には、友人行動では0を、他の評定尺度式の尺度については、

$(1 - \alpha) \times (\text{下位尺度の分散})$ の値を固定した。)その結果(1)友人関係に対する態度との関係においては、Figure 1に示されるモデルにおいて $RMSEA = .75$ ($PCLOSE = .19$)で、ほぼ適切なモデルを示す適合度が得られた。^{注2}

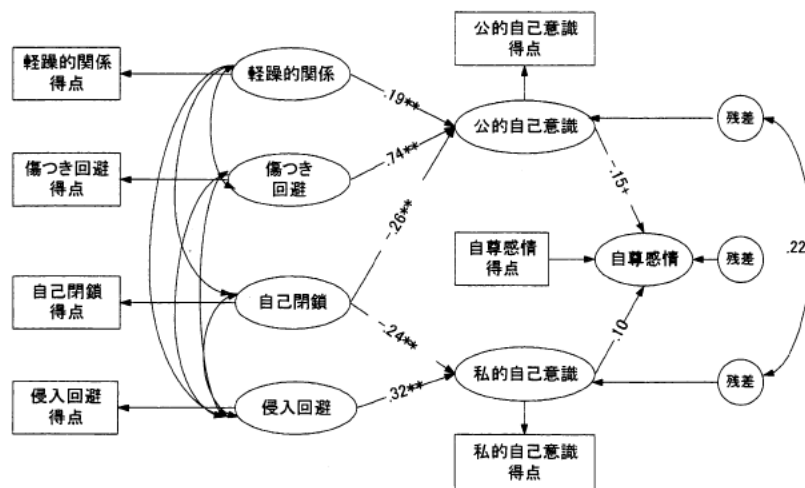


Figure 1 友人関係への態度から自己意識・自尊感情の間のパス図

(2) 友人行動(親友評定)との関係については Figure 2に示されるモデルにおいて RMSEA=.57(PCLOSE=.37)のとはぼ適切な適合度が得られた。

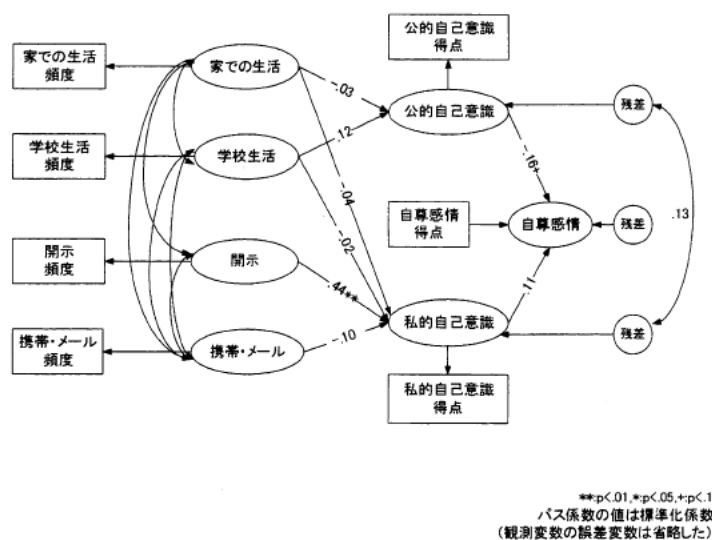


Figure 2 親友行動から自己意識・自尊感情の間のパス図

(3) 友人行動(グループ評定)については Figure 3に示されるようなモデルにおいて RMSEA=.04(PCLOSE=.47)で十分な適合度が得られたが、自己意識への顕著な影響関係は見られなかった。

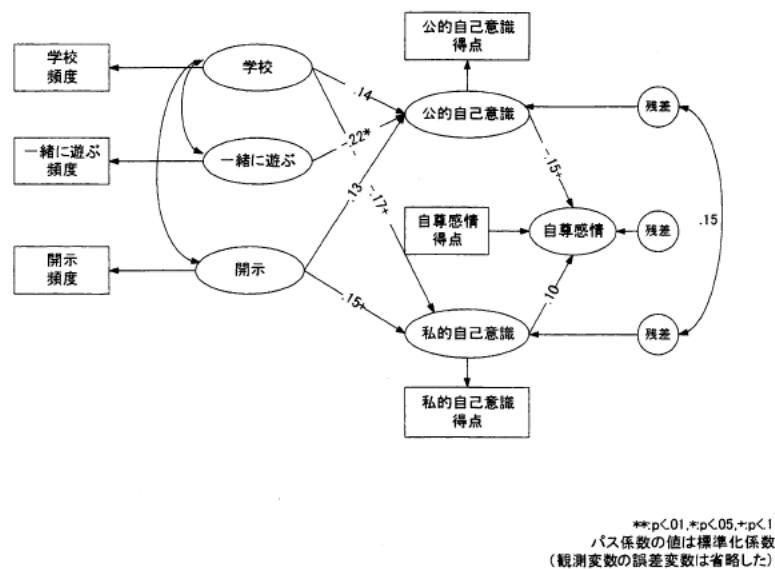


Figure 3 グループ行動から自己意識・自尊感情の間のパス図

(4) 否定的、および(5) 肯定的ライフイベントを投入したモデルでは十分な適合度は得られなかった(RMSEA=.29~.33)。またライフイベントから友人関係に対する態度や友人行動への間接的な影響を想定したモデルでも十分な適合度は得られなかった。

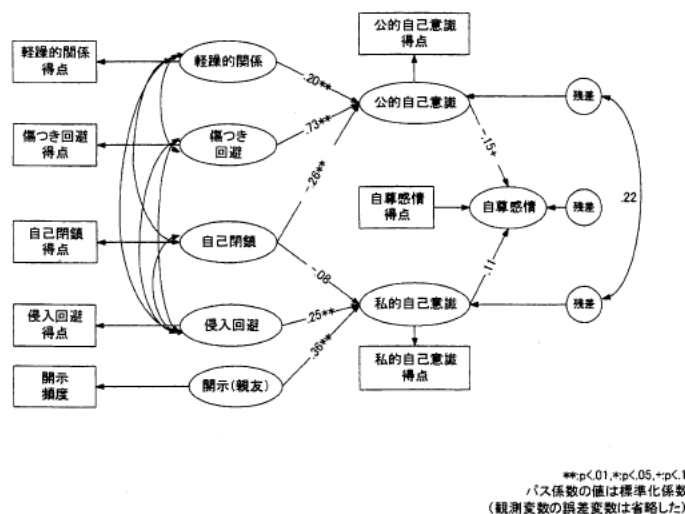


Figure 4 友人関係への態度から自己意識・自尊感情の間のパス図

以上のことから次のように考えられる。ライフイベントについては、直接、間接的にも自己意識の発達には線形的な影響力は持たないことが明らかとなった。榎本(2002)は、個々人が生育歴について物語的な文脈をもって解釈したものを「自己物語」と呼び、そうした自己物語の集大成がアイデンティティであるとしている。すなわち、具体的な経験が直接に自己の発達を促すのではなく、生育歴をいったん解釈しなおす過程を通して自己が構成されるために、直接的な経験であるライフイベントが自己意識を規定するモデルでは適合しなかったものと考えられる。このことはまた、否定的ライフイベントの有無のみを問題にしてきた青年期平穏説の限界でもあるとも言えよう。

モデル(1)については、次のように考えることができる。まず「傷つけられることの回避」から公的自己意識へのパスが.74と強い影響力が見いだされた。公的自己意識が評価懸念によって強く規定されることを示している。しかし相対的には小さいながら「自己閉鎖」から公的自己意識への負のパスも有意となった。すなわち友人関係から退却せず関係を維持することで、他者の視点取得が促進され、公的自己意識が高められることを示唆している。一方、私的自己意識については、友人関係に対する態度の影響は全体に小さいものの、「自己閉鎖」からは有意な負のパス、「侵入回避」からは有意な正のパスが見られた。すなわち、現代の青年が、相手の世界に踏み込まないように距離を取った関係を維持しながら、他者とは切り離れた自己の世界を形成しようとしている可能性が示唆される。

友人行動(親友評定)を投入したモデル(2)では、「開示」から私的自己意識へのやや強いパスが見られた。すなわち、行動面においては、内面的な話題を相互に開示しあうことが、私的自己意識を高めると言える。このことはモデル(1)で示された、侵入回避からの正の影響関係(相手に侵入してしまわぬよう距離を取ったつきあい方をする)と、矛盾した結果となった。

モデル(1)(2)での結果を受けて、友人関係への態度に親友行動での「開示」を加えたモデル(Figure 4)について検討した。モデル全体の適合度はRMSEA=.08(PCLOSE=.16)でほぼ適合していた。「侵入回避」からのパスは.252(標準誤差 .140)、「開示」からパスは.358(標準誤差.216)であり、信頼区間はそれぞれ「侵入回避」で-0.022～.526、「開示」では-.065～.781となり、両者の信頼区間は重複するため、二つのパス係数の間に有意な差は認められない。すなわち、相手に侵入しないよう気をつかうことと、内面的な自己を開示する行動との両者が同程度に内省の形成に関与していると推定できる。これは、内面的な自分を開示しつつも、他方で相手に侵入しないよう距離を取ろうとすることによる葛藤が、自分自身のあり方についての内省を促す可能性を示唆している。

なお、当初の予想に反して、自己意識特性から自尊感情へのパスはいずれも小さく、また両者間の単純相関も無相関に近かった(自尊感情 対 公的自己意識 $r=-.124$, 自尊感情 対 私的自己意識 $r=.066$ いずれも $n.s.$)。質問紙形式による自尊感情の測定は社会的望ましさや自己呈示の影響を受けやすく(潮村・村上・小林,2003), また今回用いられた Rosenberg による自尊感情尺度は、日本文化における自尊感情を十分反映していない(田中・上地・市村,2003)という問題点が指摘されている。そうしたことが、自己への注意

の向きやすさと評価感情の関連を弱めた可能性は否定できないが、この点については、今後の検討課題となるであろう。

なお本研究では横断的調査によって、友人関係やライフイベントと自己の発達について推定を行った。しかし、今後は縦断的な調査を積み重ねることで、発達の経緯をより明確に記述することが必要と考えられる。

注

- 1 Rosenberg(1965)のオリジナルの尺度では「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」(I wish I could have more respect for myself.)という項目が含まれるが、山本・松井・山成(1982)では、この項目は除外されて合成得点化されていた。またこれに代わり「自分に自信がある」が使用されていた。この代替項目を含めた10項目での一次元性は岡田(1987)において確認されており、従来この10項目で全体的自尊感情を測定することが可能と考えられてきた。なお、上記の除外項目の異質性については、谷(2001);田中・上地・市村,(2003)などでも実証的に示されている。
- 2 本研究のデータはランダムな欠損値を含むため、完全情報ML(FIML)推定が用いられた。この場合解析に用いられたソフトウェアではGFI,AGFIなどの適合度指標は出力されない。

引用文献

- Duval,S.,& Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- 榎本博明 2002 <ほんとうの自分>のつくり方: 自己物語の心理学 講談社
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化 教育心理学究,47,180-190.
- Fenigstein,A.,Scheier,M.F.,& Buss,A.H 1975 Public and private self-consciousness:Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,43,522-527.
- 笠原嘉 1976 今日の青年期精神病理像 青年の精神病理1 弘文堂 Pp.3-27.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- クレッチマー,E. 1958 新海安彦(訳)精神療法 岩崎書店(Kretschmer,E.1948 *Psychotherapeutische Studien*. Georg Thieme Verlag,Stuttgart.)
- 栗原彬 1996 やさしさの存在証明ー若者と制度のインターフェースー増補新版 新曜社
- 松井豊 1990 友人関係の機能「青年期における友人関係」(斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283-296)
- 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 1973 事例研究による平均的青年の人格発達過程 精神衛生研究 22,11-25 国立精神衛生研究所
- 西平直喜 1973 青年心理学 塚田毅(編) 現代心理学叢書7 共立出版
- 西平直喜 1990 成人になること 生育史心理学から 東京大学出版会
- Offer,D.,& Offer,J. 1975 *From Teenage to Young Manhood :a psychological study*. Basic Books:New York.
- 岡田努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究,35,116-121.

- 岡田努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究,4,162-170.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究,43,354-363.
- 岡田努 1999a 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究,47,442-449.
- 岡田努 1999b 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究,9,21-31.
- 岡田努 2002a 友人関係の現代の特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢大学文学部論集,22,1-38.
- 岡田努 2002b 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究,10,69-84
- 大平健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- Rosenberg,M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton:Princeton University Press.
- 千石保 1991 “まじめ”の崩壊:平成日本の若者たち サイマル出版会
- 総務青少年対策本部 1999 第6回世界青年意識調査
- 清水将之・頼藤和寛 1976 青春危機について(その1)文献の展望と予備的考察 精神医学,8,145-152.
- 潮村公弘・村上史朗・小林知博 2003 潜在的社会的認知研究の進展:IAT(Implicit Association Test)への招待,信州大学人文学部人文科学論集,37,65-84.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 self-consciousness scale 日本語版作成の試み 心理学研究,55, 184-188.
- 田中道弘・上地勝・市村國夫 2003 Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討,茨城大学教育学部紀要(教育科学),52,115-126.
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造:多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成,教育心理学研究,49,265-273.
- 鐘幹八郎 2002 アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版
- 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査:対人関係の希薄化との関連から見た分析
- 遠矢幸子 1996 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀字編 対人行動学シリーズ3 親密な対人関係の科学 誠信書房 第4章 Pp.90-116
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究,30,64-68.
- 付記
- 本研究の調査は平成 13-16 年度科学研究費補助金(基盤C(2)一般 課題番号 13610123「青年期危機が人格の発達に及ぼす効果に関する研究」)による研究の一部として実施されたものである。
 - 本研究では次のソフトウェアを用いて統計処理を行った。
SPSS12 for windows,AMOS5(いずれもエス・ピー・エス・エス社)
 - 本報告は岡田努 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集行動科学・哲学編 第 25 号 として掲載予定のものである

研究成果2

自己の発達と共感性の関係についての探索的研究

要旨

自己概念の諸側面と多次元的な共感性との関連について大学生に対する質問紙調査を行った。その結果、両者の間で線形的な関連性は見られなかったが、クラス分析によって回答者を分類した結果、感情的共感性が低い群では、自分自身の理想像について、心理的特性に注目した判断ではなく、身体的特性の有無に注目した判断をしていることが見出された。

個人の自己概念は、発達段階によってそれぞれ異なる側面が顕在化することが指摘されてきた(Damon & Hart, 1982; Rosenberg, 1986 など)。すなわち、幼児期から児童期にかけては、身体や活動を中心とした側面で自己記述が行われ、道具的・非情緒的な自己把握が中心であるのに対して、青年期には社会的側面や心理的側面を中心とした、内面的な自己記述が中心になるとされている。一方、発達の過程においては、自己の内面への意識(私的自己)だけでなく、自己を他者の視点から客体視する側面(公的自己)が発達していくとされている。「他者が自分をどう認識するか」の把握は、自己の把握であると同時に、他者の内的過程の推論でもあり、他者の感情に対する共感性、他者の立場に立って物事を理解する能力(すなわち脱中心化)が前提となる。このような他者の立場に立つ自己(公的自己)が形成されてのち、「理想自己」が形成され、現実自己との照応が可能となるという(柏木, 1983)。またこのことは、自己の発達と、他者の内面や感情を推測する能力(心の理論)の発達が密接に絡んでいることを示すものである。他者の感情の識別に加え、自分がその感情を経験できるような、他者の内面についてのより進んだ理解は共感性と呼ばれている(久保, 1998)。自己についての理解が発達とともにその側面が変容していくならば、より発達の高い次元に重きを置いて自己を把握する者ほど、これと平行して、高い共感性を持つものと考えられる。

共感性は認知的側面と感情側面に分けることができる(登張 2000)。Davis(1983)は「不運な他者への同情や関心という他者志向の気持ち」である「共感的関心」、「緊張する対人的状況での個人的な不安や動揺など自己志向の気持ち」とされる「個人的苦痛」、「他者の心理的視点を採用することである「視点取得」、本や映画や演劇の架空の人物の気持ちや行動のなかに自分自身が想像的に移行する傾向である「ファンタジー」の4因子を見出した(Davis, 1983; 登張 2000)。「視点取得」は他者の内的状態への推論という認知的側面が中心であり、一方他の側面はいずれも情動性との関連性が高く(登張 2000)、感情的側面を中心していると考えることができよう。(ただし視点取得についても同情などと無関係ではなく、それぞれの側面が認知的・感情的側面に完全に分類できるわけではない)

上記の心の理論との関係では、他者の内面、感情を推測する部分は認知的側面、それを感じ取る側面は情緒的側面と言うことが出来よう。よって、共感性の発達は自己の諸側面の発達の変容と

1 社交能力に自信がある	.264	.140	.033	.161	.061	.238	.005
17 性的能力に自信がある	.013	.938	.074	-.075	.024	-.037	.069
7 性的テクニックに自信がある	.017	.918	.024	.007	.010	-.053	.053
24 性的経験が豊富である	.012	.847	-.006	.030	.014	-.002	-.040
30 異性の誘い方がうまい	.016	.567	-.054	.395	-.057	.050	-.036
6 体力・運動能力に自信がある	-.003	.001	.889	.082	.007	-.051	.077
16 運動神経が発達している	.010	-.031	.881	.142	.005	-.058	.037
31 得意なスポーツがある	.133	-.060	.773	-.025	-.025	.054	-.072
23 スポーツマンタイプに見える	-.072	.192	.686	-.156	.030	.096	-.020
29 自分の外見に自信がある	-.105	.084	.012	.971	-.043	-.040	.005
11 目鼻立ちが整っている	-.017	.001	.020	.862	-.061	.006	.052
32 自分の顔に気に入っているところがある	-.048	.007	.005	.771	-.014	.049	-.080
8 自由に使えるお金が多い	.137	.027	.007	.340	.292	.093	-.073
27 家や大学などの社会的背景に自信がある	-.036	.004	.019	.000	.877	.003	-.004
18 家庭が裕福である	.028	-.035	.066	.145	.671	.038	-.171
19 出身校が有名である	-.080	.086	.025	-.147	.666	-.056	.145
9 社会的評判の良い大学に在籍している	-.138	-.026	-.074	-.081	.625	.016	.252
26 経済的な面で自信がある	.166	-.017	-.019	.368	.466	.066	-.090
22 おおらかな人柄である	.048	-.029	-.028	-.026	.025	.802	-.002
14 人に対して寛大である	-.034	-.055	.041	.055	.015	.751	.120
2 人に対して思いやりがある	-.039	.008	.042	.010	-.062	.724	.259
25 同年輩の異性と楽しく話ができる	.096	.200	.016	.169	.043	.289	-.071
15 責任感が強い	.000	.023	.008	-.047	-.017	.238	.638
5 自分に厳しい	.072	-.007	.097	.016	-.035	.077	.633
4 きちようめんな性格である	-.079	.028	-.044	-.096	.077	.046	.538
10 知的能力に自信がある	.219	-.044	-.025	.228	.248	-.136	.484
28 頭の回転が早い	.302	-.008	-.008	.358	.050	-.051	.362
因子相関行列							
因子	2	3	4	5	6	7	
1	.490	.541	.671	.427	.504	.412	
2		.465	.542	.354	.378	.261	
3			.496	.272	.475	.244	
4				.594	.462	.383	
5					.353	.347	
6						.289	

多次元共感測定尺度については、最尤法により4因子を抽出し、PROMAX 回転による因子分析を行った。パターン行列の負荷量の絶対値が.4 以上の項目を解釈した結果、第1因子は「劇や映画を見ると、自分が登場人物のひとりになったように感じる」「すばらしい映画を見ると、自分を主役の人物に置き換えてしまう」など、架空の人物に感情移入する傾向を示す項目から成り、Davis の「ファンタジー」因子にほぼ該当する内容であることから「ファンタジー」と命名された。第2因子は「緊急時には、どうしてよいか、わからなくなる」「緊急事態で、ひどく援助を必要とする人を見ると、とりみだしてしまう」など、緊急事態で自分自身が混乱してしまう内容の項目からなり Davis の個人的

苦悩因子にはほぼ合致することから、「個人的苦悩」と命名された。第3因子は「人を批判する前に、もし自分がその人だったなら、どう思うだろうかと考えるようにしている」「友だちをよく理解するために、相手の立場になって考えようとする」など他者の視点を認知的に取得する内容の項目から成り原尺度と同様に「視点取得」と命名された。第4因子は、「まわりの人が不幸でも、自分は平気でいられる」「傷ついた人を見ても、冷静でいられる」など、他者の状況に自分の感情が左右されない内容の項目から成り「冷淡さ」と命名された(Table 2)。本因子を構成する項目は元の下位尺度の因子構造とはやや異なったものとなったが、項目内容からは、「共感的関心」因子を逆転した内容を反映しているとも考えられる。Cronbach の α 係数はファンタジー:.817, 個人的苦悩:.828, 視点取得:.784, 冷淡さ:.774 で、一応の信頼性は得られた。また、「個人的苦悩」下位尺度は「情動的共感性尺度」の「感情的被影響性」下位尺度との間で $r=.573$ の相関関係があった。「ファンタジー」下位尺度は同じく「感情的暖かさ」下位尺度と $r=.454$, 共感経験尺度の「共有経験」下位尺度と $r=.409$, 「視点取得」下位尺度は共感経験尺度の共有経験下位尺度と $r=.399$, 「冷淡さ」下位尺度は情動的共感性尺度の「感情的暖かさ」と $r=-.304$, 「感情的冷淡さ」下位尺度と $r=.600$ と、それぞれ、類似した下位尺度との間に中程度以上の相関関係が見られ、併存的妥当性の指標が得られた。

2 自己像と共感性の関係 Table 4に自己像と多次元共感性尺度得点のピアソンの相関係数を示した。ここにみられるように、共感性の「冷淡さ」と理想自己の「スポーツ能力」「やさしさ」との間で.339～.356 の弱い相関が見られたが、その他では明確な相関関係は見られなかった。すなわち、共感性と自己像の発達との関係は線形的には説明できないことが示唆された。

Table 2 多次元共感性尺度の因子パターン行列

	1	2	3	4
16 劇や映画を見ると、自分が登場人物のひとりになったように感じる	.901	-.025	-.076	.046
23 すばらしい映画を見ると、自分を主役の人物に置き換えてしまう	.810	.019	-.068	.013
5 小説を読んでいて、登場人物に感情移入することがある	.627	-.017	.085	-.045
26 おもしろい小説を読んでいる時、「もしその事件が自分に起こったらどうだろう」と、想像する	.553	.044	.101	.102
7 映画や劇を見ていても、平静で、のめり込むことはない	-.533	.056	.033	.280
12 本や映画に夢中になることはない	-.322	.072	-.043	.247
20 自分の目の前で突然起こったことに、感動することがある	.236	.212	.219	-.065
22 もし自己紹介をしたら、自分を「やさしい人」と言うと思う	.170	.149	.093	.074
1 こんな事が起こるのではないかと、起こりそうな事を想像する	.132	-.064	.132	-.002
24 緊急時には、どうしてよいか、わからなくなる	-.051	.843	.047	.021
19 緊急状態でも、うまく対処できる	.215	-.711	.166	.230
6 緊急な状況では、どうしようもなく不安な気持ちになる	.029	.692	-.067	.012
17 緊張状態になると、ビクビクする	.172	.679	-.109	.133
27 緊急事態で、ひどく援助を必要とする人を見ると、とりみだしてしまう	.002	.631	.157	.027
28 人を批判する前に、もし自分がその人だったなら、どう思うだろうか と考えるようにしている	.035	.152	.713	.063
11 友だちをよく理解するために、相手の立場になって考えようとする	-.012	.026	.703	-.166
21 どんな問題にも対立するふたつの見方(意見)があると思うので、そ の両方を考慮するように努める	-.032	-.028	.668	.070
3 他人の立場に立って、物事を考えるのは苦手だ	.032	.127	-.571	.079
25 気分を害されるような相手であっても、その人の立場になってみよう とする	.061	.015	.543	.049
8 何かを決定する時には、自分と反対の意見を持つ人たちの立場に 立って考えてみる	-.023	-.161	.522	.118
2 自分よりも不幸な人たちには、やさしくしたい	.081	.173	.314	-.179
15 自分が正しい判断をしていると思うときは、他の人の意見は聞か ない	.216	.068	-.222	.171
9 スポーツの試合では、負けている側を応援したくなる	.075	.031	.166	-.035
14 まわりの人が不幸でも、自分は平気でいられる	.031	-.036	.042	.842
13 傷ついた人を見ても、冷静でいられる	-.091	.032	.147	.825
18 不公平な扱いをされている人たちを見ても、かわいそうとは思わない	.064	.013	-.116	.629
4 困っている人がいても、かわいそうだという気持ちにはならない	-.148	-.008	-.160	.429
10 感情が高ぶると、無力感に襲われる	.032	.307	.029	.309

因子相関行列

因子	2	3	4
1	.160	.234	-.088
2		.011	-.040
3			-.174

Table 3 各変数の平均と標準偏差 全体 (上段:平均, 中段:標準偏差, 下段:n)

	全体	第1 クラス	第2 クラス	第3 クラス	F(上段) 多重比較(下 段)
現実自己 個性	18.72 4.688 201	17.87 4.636 84	20.71 4.573 58	18.10 4.182 51	7.619** 13<2
性	9.27 4.118 201	8.55 3.645 84	10.98 4.556 58	8.86 3.847 51	6.932** 13<2
スポーツ能力	13.41 5.189 200	12.84 4.932 83	15.52 4.960 58	12.04 5.348 51	7.437** 31<2
外見的魅力	11.87 3.768 201	11.27 3.717 84	12.71 3.793 58	11.94 3.722 51	2.526 n.s.
社会的背景	16.90 4.069 200	16.64 4.044 83	17.43 4.389 58	16.55 3.717 51	.843 n.s.
やさしさ	12.06 2.640 201	12.18 2.556 84	12.60 2.442 58	11.14 2.807 51	4.583* 31<12
まじめさ	15.05 3.504 201	14.48 3.427 84	15.76 3.595 58	14.94 3.391 51	2.350 n.s.
理想自己 個性	26.29 3.541 201	26.52 3.555 84	27.72 2.667 58	24.24 3.718 51	15.017** 3<12
性	15.70 4.905 201	15.63 4.715 84	16.97 5.188 58	14.61 4.796 51	3.217* 31<12
スポーツ能力	18.91 3.864 201	19.39 3.677 84	20.17 3.628 58	16.76 3.808 51	12.678** 3<12
外見的魅力	19.25 3.447 201	19.54 3.338 84	19.83 3.584 58	18.12 3.497 51	3.836* 31<12
社会的背景	21.85 5.303 201	22.13 4.964 84	22.66 5.615 58	20.35 5.351 51	2.852 n.s.
やさしさ	15.43 2.805 201	16.13 2.200 84	15.91 2.910 58	13.78 2.866 51	14.155** 3<21
まじめさ	18.50 3.147 201	18.80 3.357 84	19.17 3.113 58	17.47 2.663 51	4.48* 3<12
親友 個性	20.65 4.441 201	21.12 4.773 84	21.10 4.216 58	19.57 4.110 51	2.267 n.s.
性	11.21 4.546 201	10.88 4.314 84	12.00 5.123 58	11.04 4.257 51	1.115 n.s.
スポーツ能力	14.58 4.874 201	14.52 5.048 84	15.26 5.250 58	13.73 4.327 51	1.311 n.s.
外見的魅力	14.29	14.34	14.66	13.65	1.042 n.s.

	3.680 200	3.514 83	4.145 58	3.492 51	
社会的背景	17.70 4.155 201	18.20 4.086 84	17.97 4.275 58	16.43 3.951 51	3.172* 32<21
やさしさ	13.05 2.892 201	13.49 3.075 84	13.33 2.730 58	12.08 2.741 51	4.115* 3<21
まじめさ	14.61 3.726 201	15.07 3.603 84	14.47 4.001 58	13.88 3.587 51	1.655 n.s.
共感 感情移入	20.74 5.075 201	21.13 4.672 84	23.88 3.921 58	16.39 3.970 51	
Z 得点		.077 .921	.618 .773	-.857 .782	
緊急事態	18.54 4.871 199	22.30 3.092 84	14.81 3.976 58	16.41 3.737 51	
Z 得点		.772 .635	-.765 .816	-.436 .767	
視点取得	23.97 4.884 196	23.86 4.762 84	26.52 4.453 58	21.45 4.197 51	
Z 得点		-.023 .975	.522 .912	-.516 .859	
冷淡さ	9.54 3.365 199	8.71 2.530 84	8.71 3.737 58	12.06 2.983 51	
Z 得点		-.245 .752	-.247 1.111	.749 .886	
情動的共感性尺度 感情の暖かさ	42.27 6.530 200	43.38 6.328 84	44.75 5.255 57	37.16 5.728 51	
感情の冷淡さ	26.58 6.422 200	25.32 5.246 84	24.93 7.280 57	30.22 5.798 51	
感情の被影響性	19.00 4.049 201	20.79 3.693 84	18.16 3.670 58	16.90 3.996 51	
共感経験尺度 共有経験	40.07 6.884 199	40.98 6.442 84	42.88 6.347 57	35.66 6.480 50	
共有経験不全	39.15 6.972 198	38.77 7.145 84	38.77 7.672 57	40.96 5.327 49	

Table 4 自己像と多次元共感性尺度得点の相関

	感情移入		緊急事態		視点取得		冷淡さ	
現実自己								
個性	.147	*	-.327	**	.120		.022	
	201		199		196		199	
性	.111		-.220	**	.059		.085	
	201		199		196		199	
スポーツ能力	.082		-.207	**	.179	*	-.230	**
	200		198		195		198	
外見的魅力	.040		-.214	**	-.033		.121	
	201		199		196		199	
社会的背景	.126		-.052		.039		-.061	
	200		198		195		198	
やさしさ	.147	*	-.041		.270	**	-.234	**
	201		199		196		199	
まじめさ	-.014		-.170	*	.053		.110	
	201		199		196		199	
理想自己								
個性	.281	**	-.014		.221	**	-.224	**
	201		199		196		199	
性	.068		-.042		.035		-.086	
	201		199		196		199	
スポーツ能力	.187	**	-.059		.078		-.339	**
	201		199		196		199	
外見的魅力	.098		.057		.028		-.200	**
	201		199		196		199	
社会的背景	.118		.130		.020		-.059	
	201		199		196		199	
やさしさ	.135		.189	**	.151	*	-.356	**
	201		199		196		199	
まじめさ	.010		-.004		.129		-.117	
	201		199		196		199	
親友								
個性	.134		.020		.105		.029	
	201		199		196		199	
性	.070		-.092		.155	*	.022	
	201		199		196		199	
スポーツ能力	-.044		-.110		.028		-.093	
	201		199		196		199	
外見的魅力	.047		.008		.068		-.077	
	200		198		195		198	
社会的背景	.088		.134		-.020		-.058	
	201		199		196		199	
やさしさ	.128		-.005		.155	*	-.103	
	201		199		196		199	
まじめさ	.080		.110		.008		-.038	
	201		199		196		199	

*p<.05,**p<.01

3 回答者の分類 自己についての認知と共感性の程度との非線形的な関係を検討するため、共感性尺度の尺度得点(合成得点)を投入変数とし、変数間のユークリッド距離に基づいたWard法によるクラスタ分析を行い回答者を分類した。距離係数 498.1 を規準に3クラスタを採択した(Figure 1)。投入変数のクラスタごとの標準得点の平均値を求めた結果、各クラスタは以下のような特徴を持つと考えられた。第1クラスタ(n=84)は「個人的苦悩」が平均より高く「冷淡さ」が低い群で感情的、直情径行的な群と考えられた。第2クラスタ(n=58)は「ファンタジー」「視点取得」が高く「個人的苦悩」、「冷淡さ」が低く、感情的共感性が高い群と考えられた。第3(n=51)クラスタは「冷淡さ」のみが高く、他は

平均値より低い場合、共感性が低い冷淡群と考えられた。用いた変数の合成得点について、全体および各クラスでの平均値と標準偏差を Table 3 に示す。

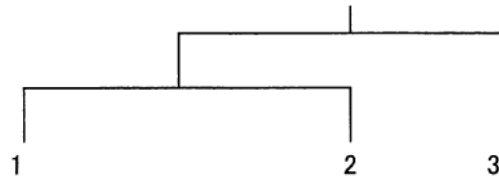


Figure 1 得られたクラスターのデンドログラム

各クラス間で、自己像に関する各尺度得点の平均値を一元配置分散分析により比較した (Table 1)。多重比較 (Tukey 法) の結果、現実自己の個性、性、スポーツ能力で最も高く、また現実自己の「やさしさ」、理想自己の「個性、性、スポーツ能力、外見的魅力、まじめさ」で最大、また理想自己の「やさしさ」でも、第3クラスより有意に高かった。このように感情的共感性の高い第2クラスは、現実・理想ともに自己像について肯定的であることが見いだされた。

理想自己の側面と共感性の関連: 重視する自己の側面の発達の変化と他者に対する共感性の発達の関連を検討するため、柴山 (1994) を参考に個人差多次元尺度法による分析を行った。理想自己像について各項目 × クラス間の相関行列を求め、これを $\sigma = \sqrt{1 - r^2}$ によって非類似性の行列に変換し入力データとした。S-Stress の値の減少および解釈可能性を参考に2軸までの結果を採択した。各群共通の空間に項目を布置したものを Figure 2、クラスごとの重みづけ係数のプロットを Figure 3 に示す。

項目の布置から第1軸は、負方向に「個性」「やさしさ」、正方向に「社会的背景」「外見」などが布置され、内面的特徴 (-) ~ 外面的特徴 (+) を区別する軸であると考えられた。また第2軸は負方向に「性」「スポーツ能力」などが布置され、正方向に「まじめさ」「社会的背景」などが布置されることから、身体的特性 (-) ~ 非身体的特性 (+) を区別する軸であると考えられた。

重みづけ係数のプロットからは第1、2クラスが対角線よりも第1軸方向に、第3クラスが対角線よりも第2軸に重みづけられる方向に布置されていた。また、Table 3 に見られるように第3クラスは理想自己のすべての得点で、各クラスの最低得点を示し、第2クラスは高い得点を示す傾向にあった。すなわち第3クラス (冷淡群) は共感性の高い第1、第2クラスに比べ、理想とする自分のあり方に関して、「内面的か外面的か」ではなく、「身体的か否か」に基づいて理想自己を判断し、その結果、すべての側面について自分の理想にはあてはまないと判断していることになる。反対に第1、2クラスは「内面的か外面的か」に基づいた判断をし、その結果、第2クラスは自分の理想にあてはまると判断していることになる。

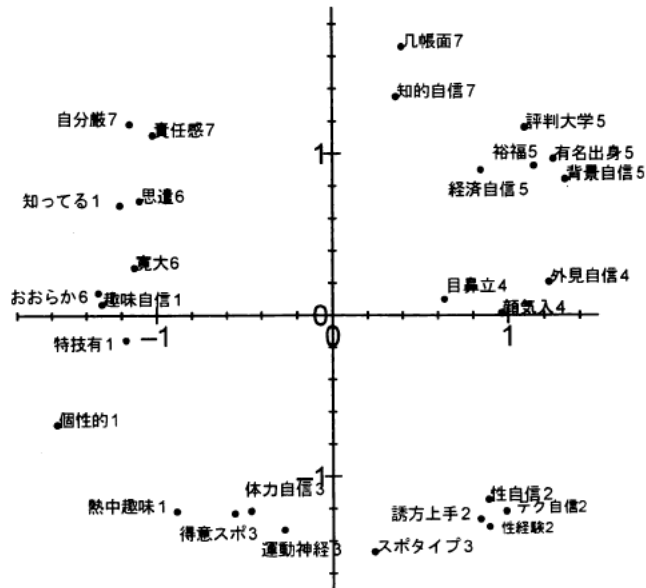


Figure 2 理想自己像の項目の布置

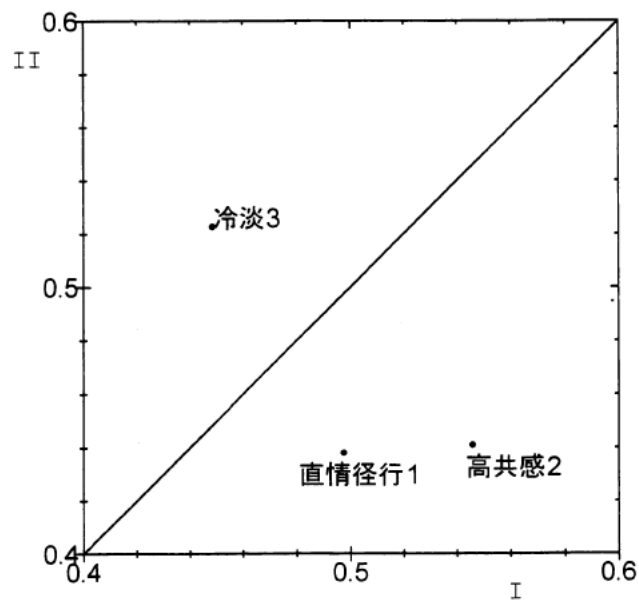


Figure 3 クラスタごとの重みづけ係数のプロット

感情的共感性が低い者ほど、自分自身の理想像についても、心理的特性に注目した判断ではなく、身体的特性の有無に注目した判断をしていると言えよう。このことは、Damon & Hart (1982); Rosenberg(1986)らが記述したような、自己を判断する際の基準における発達の相違があるとすれば、感情的共感性が低位の者は、より発達の低次の段階で理想自己を判断している可能性が示唆される。

付記

本研究成果は 岡田努 2005 自己の発達と共感性の関係についての探索的研究 自己心理学 2 として掲載予定のものである

引用文献

- Damon, W., & Hart, D. 1982 The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child development*, 53, 841-864.
- Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of personality and social psychology*, 44, 113-126.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情緒的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 51-70.
- 久保ゆかり 1998 「気持ちを読みとる心の成長」丸野俊一・子安増生(編) 子どもが「こころ」に気づくとき ミネルヴァ書房 Pp.83-107.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係: 多次元共感測定尺度を用いて 奈良教育大学紀要 37, 149-154.
- Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A.G. Greenwald (Ed.), *Psychological perspectives on the self* vol. 3 (Pp. 107-136) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 角田豊 1994 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み, 教育心理学研究, 42, 193-200.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

研究成果3

縦断的研究による青年の自己概念の変容について

以下では、大学生に対する縦断研究の結果に基づいて、自己概念の変容とそれに関わる要因について考察を行う。

自己概念は、児童期までは、表層的、可視的属性(身体的特徴、持ち物、特技など)を中心として発達し、青年期以降には、内面的、社会的属性(対人関係や自分の性格、信念など)へとその焦点を移行させると考えられている。こうした自己概念の発達に対して、危機体験(個人にとって転機となったと思うライフイベント)や親密な対人関係、さらに個人の内省傾向がどのように影響を与えるかについて縦断的な研究を行った。

方法

質問紙調査

友人関係、自己意識、自己概念、共感性、ライフイベント体験及び転機となったライフイベントに関する質問項目を実施した。

友人関係尺度:本研究成果1によって作成されたもの

自己の諸側面に関する尺度:本研究成果2によって作成されたもの。現実自己、重視する自己、理想自己について回答を求めた。

共感性尺度:本研究成果2によって用いられたもの

転機となったライフイベント:本研究成果1によって用いられたもの。最近2～3ヶ月以内で経験した事柄について選択し、さらにその内で、自分自身にとって重要な転機となった事柄に印をつけるように求めた。

自己意識尺度:内省傾向について測定するために菅原(1984)の自己意識尺度を用いた。

調査概要

本調査は3つのコホートに対して実施された。

コホート1

第1回調査 2002 年 7 月:石川県内の4年制大学において授業時間中に実施(有効回答数 44 名)

第2回調査:2003 年 1 月(有効回答数 41 名)

2回の調査での照合数:28名

コホート2

第1回調査 2003 年 5 月:石川県内の4年制大学において授業時間中に実施(有効回答数 192 名)

第2回調査 2003 年 7 月(有効回答数 162 名)

第3回調査 2004 年 1 月:第2回調査時点で、以後の調査への協力を依頼し、協力が得られた 29 名について郵送留置法により実施(有効回答数 18 名)

第4回調査 2005年1月 第3回調査と同じ回答者に対し郵送留置法を実施(有効回答数 20名)

コホート3

第1回調査 2003年5月:首都圏4年制私立大学,授業時間中に実施(有効回答数 68名)

第2回調査 2003年11月:(有効回答数 30名)

結果

各コホートで最終的に照合された人数は少数であるため,1年間のうち同一時期に実施された調査についてとりまとめ($n=53$),全体的傾向を分析した。

友人との内面的な関係によって内省が促進されかどうかについて検討するため,友人関係尺度と自己意識尺度の相関を求めた(Table 1)。

Table 1 友人関係と自己意識の相関

	友人関係/私的自己意識	第1回	第2回	第3回
第1回	自己閉鎖	-.253	-.225	-.137
	軽躁的關係	.259	.277	.237
	侵入回避	.169	.377	.425*
	傷つけられことの回避	.407*	.559*	.533**
第2回	自己閉鎖		-.003	.127
	軽躁的關係		.195	.160
	侵入回避		.547	.457
	傷つけられことの回避		.514	.524
第3回	自己閉鎖			-.295*
	軽躁的關係			.200
	侵入回避			.204
	傷つけられことの回避			.441**

ここに見られるように,内面的関係(自己閉鎖の逆転得点)と私的自己意識の間には負の相関関係が見られ,特に第1回同士,第1回と第2回の間に顕著に見られた。このことから内面的関係が内省的関係を促進することが見出された。また,「傷つけられることの回避」得点が高い者が,その後の調査で内省傾向が高まることを見出された。このことは,自らの傷つきやすさに目が向くことが,内省を促すことを示唆するものである。

次に内省傾向が自己の発達に及ぼす影響について検討するため,私的自己意識得点と自己の諸側面の間の相関を求めた(Table 2)。その結果,過去の内省が「性」の側面での現実自己,「個性」,「性」の理想自己,「性」,「スポーツ能力」での重視自己に関わることが見出された。また,調査時点での同時的な内省(現在の内省)は,「やさしさ」,「まじめさ」での現実自己,「個性」,「やさしさ」,「まじめさ」の理想自己,「個性」「やさしさ」「まじめさ」での重視自己に関わることが見出された。これらのことから,内省は,自己の内面的な属性の発達に関わることが示された。

次に,第1回調査時点での個人にとって転機となったライフイベントと自己概念との相関関係を求めた。

Table 2 自己の諸側面と私的自己意識の相関

自己の側面/私的自己意識		第1回	第2回	第3回
第1回	現実自己	個性	.173	
		性	.325	
		スポーツ能力	.385	
		外見的魅力	.305	
		社会的背景	.165	
		やさしさ	.283	
		まじめさ	.421*	
	理想自己	個性	.261	
		性	.280	
		スポーツ能力	.116	
		外見的魅力	.279	
		社会的背景	.223	
		やさしさ	.067	
		まじめさ	.305	
	重視自己	個性	.484*	
		性	.378	
		スポーツ能力	.333	
		外見的魅力	.522**	
		社会的背景	.335	
		やさしさ	.188	
		まじめさ	.453*	
	現実自己	個性	.309	.283
		性	.052	.142
		スポーツ能力	.151	-.089
		外見的魅力	.138	.120
		社会的背景	.263	.234
		やさしさ	.280	.471**
		まじめさ	.529	.203
	理想自己	個性	.675*	.391*
		性	.279	.157
		スポーツ能力	.222	.129
		外見的魅力	.311	.223
		社会的背景	.200	.311*
		やさしさ	.218	.337*
		まじめさ	.416	.254
第2回	重視自己	個性	.594*	.282
		性	.281	.174
		スポーツ能力	.223	.163
		外見的魅力	.593*	.295
		社会的背景	.284	.285
		やさしさ	.309	.322*
		まじめさ	.184	.214

第3回	現実自己	個性	.146	.198	.090
		性	.408*	.236	-.094
		スポーツ能力	.357	-.146	.037
		外見的魅力	.311	.008	.048
		社会的背景	.216	.208	.244
		やさしさ	.298	.447**	.491**
		まじめさ	.215	.123	.343*
	理想自己	個性	.429*	.209	.508**
		性	.439*	.134	.032
		スポーツ能力	.373	.037	.221
		外見的魅力	.368	.185	.256
		社会的背景	-.016	.085	.284*
		やさしさ	-.046	.103	.326*
		まじめさ	.343	.189	.569**
	重視自己	個性	.303	.131	.473**
		性	.504*	.134	.040
		スポーツ能力	.534**	.126	.213
		外見的魅力	.383	.169	.188
		社会的背景	.023	-.124	.125
		やさしさ	.214	.193	.474**
		まじめさ	.371	.171	.579**

**: $p<.01$,*: $p<.05$

その結果、対人的イベントに関しては否定的イベントで、「性」「外見的魅力」「社会的背景」など表層的な自己との正の相関が有意となった(第1回調査の自己との間では現実自己の「性」と $r=.42$, 現実自己の「外見的魅力」と.47, 第2回調査の自己との間では, 現実自己の「外見的魅力」と.79, 第3回調査の自己との間では, 現実自己の「運動能力」と.41)。肯定的イベントでも一部, 内面的側面との間で相関関係が見られたが(第3回調査 重視自己「まじめさ」との間で $r=.42$)、他は、表層的側面との関係のみが見られた(第1回調査, 現実自己「社会的背景」と.53, 第2回調査, 現実自己「外見的魅力」と.73, 重視自己「外見的魅力」と.57)。達成的イベントについては、否定的イベントで同様に表層的自己との正の相関が見られた(第2回調査の自己の理想自己「社会的背景」と.69, 重視自己外見的魅力と.64, 社会的背景と.57)。一方肯定的イベントでは、一部表層的属性との関連も見られたが(第2回調査 現実自己「性」と.59)、他は内面的側面との正の相関が見られた(第2回調査の現実自己「個性」と.42, 理想自己「やさしさ」と.59, 理想自己「まじめさ」と.71, 重視自己「やさしさ」と.57, 第3回調査現実自己「個性」と.56)。以上のことから、対人的イベントについては肯定・否定ともに、より発達の低い水準を示す表層的自己の側面を重視し、そうした属性を自分自身の属性と認識する傾向が強く、達成的イベントでは、肯定的イベントにおいては、むしろ発達の高い自己の側面を強調することが見出された。このことは、従来考えられてきたような、青年期における様々な危機体験が必ずしも自己の発達を促進するだけではなく、むしろ発達を抑制する機能も持つことを明らかにしたと考えられる。

第3回	現実自己	個性	.146	.198	.090
		性	.408*	.236	-.094
		スポーツ能力	.357	-.146	.037
		外見的魅力	.311	.008	.048
		社会的背景	.216	.208	.244
		やさしさ	.298	.447**	.491**
		まじめさ	.215	.123	.343*
	理想自己	個性	.429*	.209	.508**
		性	.439*	.134	.032
		スポーツ能力	.373	.037	.221
		外見的魅力	.368	.185	.256
		社会的背景	-.016	.085	.284*
		やさしさ	-.046	.103	.326*
		まじめさ	.343	.189	.569**
	重視自己	個性	.303	.131	.473**
		性	.504*	.134	.040
		スポーツ能力	.534**	.126	.213
		外見的魅力	.383	.169	.188
		社会的背景	.023	-.124	.125
		やさしさ	.214	.193	.474**
		まじめさ	.371	.171	.579**

**: $p<.01$,*: $p<.05$

その結果、対人的イベントに関しては否定的イベントで、「性」「外見的魅力」「社会的背景」など表層的な自己との正の相関が有意となった(第1回調査の自己との間では現実自己の「性」と $r=.42$ 、現実自己の「外見的魅力」と.47、第2回調査の自己との間では、現実自己の「外見的魅力」と.79、第3回調査の自己との間では、現実自己の「運動能力」と.41)。肯定的イベントでも一部、内面的側面との間で相関関係が見られたが(第3回調査 重視自己「まじめさ」との間で $r=.42$)、他は、表層的側面との関係のみが見られた(第1回調査、現実自己「社会的背景」と.53、第2回調査、現実自己「外見的魅力」と.73、重視自己「外見的魅力」と.57)。達成的イベントについては、否定的イベントで同様に表層的自己との正の相関が見られた(第2回調査の自己の理想自己「社会的背景」と.69、重視自己外見的魅力と.64、社会的背景と.57)。一方肯定的イベントでは、一部表層的属性との関連も見られたが(第2回調査 現実自己「性」と.59)、他は内面的側面との正の相関が見られた(第2回調査の現実自己「個性」と.42、理想自己「やさしさ」と.59、理想自己「まじめさ」と.71、重視自己「やさしさ」と.57、第3回調査現実自己「個性」と.56)。以上のことから、対人的イベントについては肯定・否定ともに、より発達的に低い水準を示す表層的自己の側面を重視し、そうした属性を自分自身の属性と認識する傾向が強く、達成的イベントでは、肯定的イベントにおいては、むしろ発達的に高い自己の側面を強調することが見出された。このことは、従来考えられてきたような、青年期における様々な危機体験が必ずしも自己の発達を促進するだけでなく、むしろ発達を抑制する機能も持つことを明らかにしたと考えられる。